

# 内科医 つれづれ草

高山浩一

⑤

肺がんの治療法は手術、放射線治療、薬物療法の三つに大きく分かれ、われわれ内科医は薬を使った治療を担当しています。がん治療に用いられる薬には、従来の抗がん剤に加えて、分子標的薬と呼ばれる薬が広く治療に用いられています。肺がんに対する分子標的薬は、15年ほど前に初めて「イレツサ」が登場して以来、次々に新たな薬が開発されています。

## がん分子標的薬

がん細胞の特定の遺伝子に傷があることもよく効くため、今やこうした薬なしには肺がん治療が考えられないほどです。分子標的薬が登場してきた当初は、がん細胞だけを狙い撃ちするため副作用は極めて軽いという触れ込みでした。だが、実際に使ってみると、さまざまな副作用が出るのが分かってきました。

## 外見の変化に配慮も

ただかねはなりません。顔には発疹が出やすいこともあり、特にケアが必要です。化粧に慣れている女性の患者さん



イラスト・山本重也

んは抵抗なくできる方が多いのですが、年配の男性患者さんは塗るのを忘れてしまうこともあるので、入院中に看護師さんからしっかりと指導していただいています。かなり前のことになりましたが、30代女性の肺がん患者さんが、緊急入院して来られました。急にけいれんが起ったのです。検査してみると、脳にけいれんの原因となった転移病変が認められました。分子標的薬による治療が当初はともよく効いていたので、どうして急に悪化したのか、検査結果を見ただけでは原因がよく分かりませんでした。

患者さんの体調が回復して、よく話を聞いてみると、理由はすぐに判明しました。主治医が処方した分子標的薬を飲んでなかったのです。どうして？と聞いてみると、顔に発疹が出るのが嫌でたまらなかつた。その若い女性には、外見を損ねる皮膚障害は肺がんが進行するよりつらいことだったので。抗がん剤には発疹だけでなく、脱毛や肌のしみ、爪の変形など外見を損ねる副作用が多くあります。一方、脱毛に対するウィッグだけでなく、最近化粧で手術の傷痕や抗がん剤による皮膚の発疹、しみなどを隠すカバーメイクの技術も進歩しています。がん診療に携わる医師は、治療に伴う外見の変化にも配慮する必要があります。

(京都府立医科大学教授)